

現代児童文学の〈始まり〉をめぐって

藤田 のぼる

1

「現代児童文学」がいつから始まったのかという点については、まずはほとんど議論の余地がない。すなわち、一九五九年、昭和でいえば三四年で、そこに佐藤さとの『だれも知らない小さな国』といぬいとみこの『木かげの家の小人たち』の二冊をおくのが定説となっている。前回紹介した『日本児童文学』七四年十月号「現代児童文学の出发点」特集の扉に、「戦後派作家たちが……意欲的な長編をひっさげて登場したのは、五七〜六〇年にかけてである」と書かれているのは、いぬいとみこの第一作『ながいながいペンギンの話』が宝文館から出版されたのが五七年であることを踏まえてものだろうが、これは一種のフライングのようなものだった。この言い方はおかしいかもしれないが、他のランナーたちがまだスタートできなかったのだから、結果的にそういうことになる。フライングというな

ら、『だれも知らない小さな国』は、五九年三月にタイプ印刷の自費出版本として出されたのだから、こちらのほうが意図的フライングかも知れない。だが、同年のうちにこれが講談社から商業出版として出し直されたことで、そして、それを追いかけるようにこの年と翌年に次々と新人の創作単行本が出版されたことで、「先陣を切る」形となったのだ。

前述の『木かげの家の小人たち』は中央公論社からの出版だが、翌六〇年には理論社の創作児童文学シリーズが本格的にスタートする。このことが、六〇年が現代児童文学の確かな起点となった大きな要因だった。ちなみに、この時期に理論社のシリーズとして出された主なものを書き記すると、

（一九六〇年）山中恒『とべたら本こ』『赤毛のポチ』、鈴木実・他（共同創作）『山が泣いてる』、今江祥智『山のむこうは青い海だった』